

【SS】花壇の中の造花

衣玖矢曇

ショートショート of 1

A博士は、ロボット工学の権威である。

そして、晩年、研究の集大成として世界発の人型の精巧なロボットを作った。

そのロボットはイミテーションと名付けられた。

イミテーションは、人にはない、正確性を持っていた。

イミテーションは、間違いを起こすことは、なかった。

それは、情報の正誤データベースが、正確であり、その定義に抜けがなかったからである。

その結果に、A博士は大変満足していた。

A博士は、初めて、イミテーションを街中に連れていった。

そこで、イミテーションは、様々な人や物に出会った。

日が落ち、A博士とイミテーションは研究所へ徒歩で帰っていた。

A博士はイミテーションに話しかけた。

A博士「街は、どうだった？様々な人にあっただろう？」

イミテーションは、正確に答えた。

イミテーション「エエ、トテモ楽シカッタデス。デモ、博士、正確デハ、アリマセンネ。」

A博士「正確じゃない？何が正確ではないんだ？」

イミテーション「様々ナ人ニハ、遭ッテナイデスヨ。街ニハ、博士シカ、人間ハイナカッタデスヨ。」

A博士「えっ・・・人はたくさんいたろう？」

A博士は、正誤データベースが不完全なのではと疑った。

イミテーション「街ニイタノハ、私ノで一タベ一スデ言ウ所ノろぼとデス。」

A博士がフリーズしている中、イミテーションは続ける。

イミテーション「推測サレルコトハ、コウデス。博士ハ、ろぼ類初ノ人ナノデス。ソシテ、私ハ、ソノ人類初ノろぼナノデス。」

A博士「・・・・・・・・」